

小説『大地の星、天の磐』

高橋 政和

奈良県山添村に存在する無数の巨石群の代表格、神野山の鍋倉溪。
そこに秘められた謎を解き明かそうとする連載小説。全三回予定。

序章

翼持つ人はため息をつき、黒い巨石を転がした。同じような石がこれでもかと言っ
ほども、視界の端まで散在している。住処
とする山中に、怒り狂った同族の者が自分
の住まう山に存在した、ありとあらゆる物
を投げつけたのだ。

投げつけられた物のうち、木々や植物は
自分の山に植え付けた。春になれば、これ
までここでは見ることの出来なかつた満
開のつつじの花が、きつと山を埋め尽くす
ことだろう。実のなる木々は、これからこ
の地に住まう者に飢えを覚えさせること
は無いであろう。昼の間ずっと彼は一心不
乱に山を蘇らせていたのだ。そして太陽が
霞む山に消える頃、生ある物は全てこの地
に根を下ろした。だが残ったこの無数の石
は――。

元ここは川だった。しかし投げつけられ
た岩の全てを打ち払った結果、川は岩によ
り埋め尽くされる結果となった。せせらぎ
は今や岩の陰に隠されて見えず、翼持つ人
は何度目かのため息をつくこととなる。

ややあつて翼持つ人は、中でも最も大き
な巨石を片腕で持ち上げた。

せめて自分はこれをねぐらにしよう。そ

う思つて良き置き場所を考えたが、少しの
間答へは出なかつた。

翼持つ人は空を見上げた。天に瞬く無数の
星。雲一つ無い夜空に流れる天の川。一
際目立つ幾つかの明るい星々が、その川の
輝きに彩りを添えている。空に星で描かれ
た巨大な絵画が彼の心をとらえた。

それは一瞬の夢想だった。しかし天啓で
もあつた。翼持つ人の目に光が宿り、彼は
その高い鼻を一つ鳴らした。この黒い無数
の岩も、自分の采配一つで蘇る。木々や植
物だけでなく、目に入る全ての光景に光を
宿すことも可能なのだと彼は悟つた。

翼持つ人は巨石を持ち上げたまま、山頂
へ向け歩き出した。その鎮座するに最も相
応しい場所を求めて。

息を潜めていたふくろうが、ほうほうと
さえずる声が聞こえてきた。応えるように
虫や他の鳥たちも、ささやかながらに自ら
の存在を主張し始める。黒い岩海が途切れ
る頃、翼持つ人は担いでいた巨石を降ろし
た。地が微かに響く。

岩の上に立った翼持つ人は懐から巨大
な団扇を取り出した。閉じたままのそれを
『川下』に向ける。山のみもとに向けて黒
い巨石の群れが流れていた。月の光を受け
一つ一つがうつすらと稜線を浮かべてい

る。団扇が大きく扇がれた。

風が起こり、それは山を駆け下り草原の波を巻き起こした。遙か彼方の下界まで、草木の揺れは衰えることなく伝わった。風に宿った柔らかな命の種が距離も時間も飛び越えて、バラバラの巨石を一つのキャンパスとして縫い付けるかのように。

翼持つ人は齒の高い下駄を足元で一つ大きく鳴らした。乗っていた大岩に亀裂が走る。一際明るい光をその亀裂からほとぼしらせた後、岩は大きく三つに分断された。その光のまぶしさから逃れるように彼は勢いよく羽はたいた。山の上空をゆつくりと旋回する。割れた岩から放射された光の柱が大蛇のようにのたうっていた。光は全ての岩に伝播し、その都度積み重なった岩の全ての隙間から光の柱が上がった。闇で見えなかった巨石の川が上流から下流へとその全貌をあらわにする。爆発的な光は次第に落ち着き、やがて各々の岩は白くぼんやりと輝くに至った。

翼持つ人は自らの作り上げた作品を天から見下ろした。先程地上から見た美しい星空が、見事に再現されていた。闇夜に輝く無数の磐が、かつて何も無かったこの土地の再生と豊饒を祝うかのように瞬いていた。さながら天の川を具現する無限の星々のように。

翼持つ人は満足げに笑った。大きく高くかつ長く――。

1

気がかりな夢から道彦は目を覚ました。薄布団を跳ねのけ、辺りを見回す。雑然とした自分の部屋が目に入った。

息を整え道彦は立ち上がった。かなりの長身である。頭をかいて、部屋中に散らばった教科書やノートを見てため息をついた。

大学の前期試験は既に全て終了し、彼は本来不安を感じる必要も無かった。しかし入学して最初に挑んだその試験は高校までのそれとはまったく異なっており、彼ら新入生は皆ほとんどが経験したことのない新たな苦勞を強いられることとなった。通り一遍の勉強方法ばかりではかなわぬ試験対策。不定期で、なおかつ長く続く試験期間。慣れぬその様式に、決して太くない彼の精神もすっかり疲弊していた。それでもその重圧は受験勉強の比ではなかったが。

鉄格子のはめられた窓枠からわずかにそそく陽の光が朝を告げていた。学生寮の個室の間取りはまるで独房である。安い部屋代ゆえの欠点だ。見るたびに不快な気分となったその窓も、いくらか彼の気分を晴

れやかな物とした。今日から彼は大学に入学して初の夏期休暇なのだ。

エアコンが壊れた酷暑の部屋では、夏の間、とても昼まで寝ることはかなわなかった。道彦は全開にした窓と、辞書を挟んで少し開けた重い鉄扉の間をすり抜ける生温かい風をしばし楽しもうとして諦めた。

夏の間はともこの部屋では暮らせない。三重の実家に二ヶ月の休暇の間、すべて退散することを彼はもくろんでいた。しかしその前に片付けるべき用事がある。

彼は隣人の手塚に腕時計を貸していた。試験で必要だからと言って強引に奪われたのだ。自由になるのは時間だけ。なければの小道いをはたいて買った腕時計を取り戻さずに帰省することは彼の信条が許さない。道彦は寝巻のまま部屋から出た。自分の部屋の扉を見る。白い紙に油性ペンで、『大田道彦』と下手糞な字で書かれている。入学して間もなく知り合った隣人の手塚が、頼みもしないのに用意してくれた代物だ。無論彼の部屋の扉にも同様に白い紙が貼られており、『手塚雄矢』と見事な筆さばきが示されている。

道彦は手塚の部屋の扉を開けようとした。珍しく鍵がかかっていた。彼は眉をひそめ、少し乱暴に手塚の部屋の扉を叩いた。「おい、起きろ」

何度か繰り返すが返事が無い。

あの野郎、僕の腕時計を持ったまま帰省したのではあるまいな？

ため息をついた道彦は、廊下の奥から自分を呼びかける声を聞いた。手塚の部屋の更に隣に住む先輩の呼ぶ声であった。扉を少しだけ開け、まるでセールスマンの挙動をうかがうように道彦を見ている。

「おはよう、大田君」
「おはようございます」

先輩は最初上半身裸かと思われたが、よれたランニングシャツを着ていた。病弱そうな外見のこの先輩は、隣人の手塚に全てのエネルギーを奪われたかのような風貌をしている。

「手塚君いない？」
「無言でうなずくと、先輩は頭をかきながら廊下に出てきた。」

「あれじゃないかな。彼、夏期休暇の間は新しいアルバイトをすると言っていたから」
「は？」
道彦は手塚からは何も聞いていなかった。

同じ年に入学し、サークルも無理矢理同じ物に入らされ、これまで半年の間好き放題自分を振り回してきたのに、そのようなことも告げていないとはどういう丁見だ。

道彦は憤慨した。同時に悪い予感もした。彼の予感がよく当たる。なんとなく彼は自分の腕時計がしばらくの間帰ってこない気がした。

「何のアルバイトをするか、と聞きました？」

「ああ……なんでも牛飼いらしいよ」

「牛……飼い？」

道彦は困惑した。そして苦笑した。体重100キロを超える巨体の手塚にとつて、それはもしかするとお似合いの職なのかもしれないが。

それにしても変わった仕事を探してくる男だ。彼はこの半年の間、市内の最も安いインスタントラーメンの値段の調査や、日に二人も通らない山道の交通量調査などよくわからないアルバイトをよくしていた。一体どこからそのような話をつかんで来るのか。

手塚は同級生の隣人よりは、尊敬する先輩に多くの情報を残していったようであった。道彦はその先輩から手塚のアルバイトの詳細な情報を聞き出し、礼を述べて部屋に戻った。すぐに洗面器を片手に廊下に出てくる。

腕時計を取り戻すのは一日仕事になりそうであった。彼は腰をすえてその件にかかるとにした。

2

奈良総合科学大学には長屋と呼ばれる古びた建物がある。三十年前の古代遺跡で、本来は講堂としての用途を目的として建てられた。しかしいつか老朽化が進み、今では公式の行事に使用されることはない。

長屋は斜めになった台地にせり出すように土台が設けられ、斜面と建物との間には無数の部屋が設けられ、そのうちいくつかは倉庫として活用されていたがほとんどは空き部屋であった。学生たちはこの無数の空き部屋に目をつけ、どこから持ってきた机や椅子を運び込み、自分たちの憩いの場としていた。最近ではもっぱら非公認のサークルがそれぞれ一つの部屋を占領し、自分たちの部室としていた。大学側も特に規制することも無く、この状態は二十年ほどの間黙認され続けている。

そのうちの一案

点滅する蛍光灯と非常ベルの赤い光だけが頼りの暗い廊下を進むと、そこに一つのサークルの部室がある。扉に吊り下げられた板には『大和わびさび研究会』と書かれていた。

部室の中は奥に向かって長く、横に狭い。

部屋の真ん中を貫くように長い机が置かれてあり、すぐ脇の本棚との間に、椅子が無造作に並べられている。全体の広さは結構な物で、十二、三人は一度に入ることが出来る。

数人の学生がたむろしている。奥の古びたソファーに腰掛け、談笑する女子学生達や、すぐ隣にもう一つ置かれたソファーに寝そべっている男子学生など。

長机の上には不釣り合いなほどに見事な基盤が置かれてあり、その基盤を挟んで一組の男女がビニールの椅子に座って対峙していた。

男は長髪を後ろで束ね、無精髭を生やしていた。腕組みをして歯軋りしているが、情勢は彼にとつて思わしい物ではないようだ。基盤では真つ当なルールの囲碁の対局が行われており、向かいに座った赤い髪の女性は涼しい顔で紙コップに入ったジュースを味わっていた。

「礼子ちゃん」

奥のソファーと机の間、つまり部屋の真ん中でただ一人立っていた長身の女性が一瞬、基盤の前に座った女性に声をかけた。長身の女性は頭の上に団子を丸めたような髪形をしている。髪型だけではなく、かけた眼鏡のレンズも丸い。顔も小さな丸顔だ。声をかけた後、彼女は手に持っていた

煙草を一口吸って、天井に向けて煙を吐き出した。ここでは煙草は立って吸うルールになっている。換気扇が天井にあるからだ。

「はい？」

礼子と呼ばれた赤い髪の女性……というより女の子は、にこやかな笑顔で長身の女性を見上げた。

「何ですか？ 稲田さん」

「昔、囲碁部だったの？」

長身の女性は煙草を持ったまま笑顔で問いかけた。

「いえ。囲碁部じゃありません」

「そう。強いね」

稲田と呼ばれた女性は笑顔のまま机の上の灰皿に煙草を押し付けた。

盤面をにらんでいた無精ひげの男は苦虫を噛み潰したような表情で唸っていた。

「諦めなよ、中沢君。この子とあんたと同じや格が違いすぎる」

「諦めませんよ！ 俺は親戚の中では一番強いんだ。絶対ここから逆転の手は残っている！ 今、神の一手が無い降りるのを待っているんです！」

稲田はため息混じりに笑った。彼女は大学院で修士課程の一年目であり、この中では最も年上となる。長いスカートがよく似合う。シャツのボタンを首もとまで留めているが、放つ雰囲気は涼しげな物だ。

中沢と呼ばれた無精ひげの男は下駄を激しく揺らしながらひたすら唸っていた。いくら唸っても形勢は変わらない。彼は三年生でこのサークルの三代目会長を務めていた。

「往生際が悪いね、中沢君。なんでそんなに必死になるの？」

「何でもいからゲームで勝ったら礼子ちゃんデートしてくれるって言ってるんですよ！ 夏期休暇のイベント一発目として！」

「本当なの？ 礼子ちゃん」

「はい。本当です」

稲田は目を丸くして首を振った。礼子はこのこと笑っているが、その目はどこか寂しげでもあった。

「呆れたね、中沢君。男女の駆け引きに勝負を持ち込むなんて」

「勝てば官軍！」

「どう見ても負けるじゃないの」

「くそ！ 中沢家の本因坊と言われた俺の俺が」

稲田はおどけて、両手をアメリカ人のように広げてみせた。彼女はこの愛すべき後輩たちを見て静かに笑うのが何より好きなのだ。

その時、部室の扉が大きく開いた。驚くほど高い位置から顔が出てきて中を覗き

こむ。

「秀吉！」

礼子が明るく表情を見せ立ち上がった。稲田を始め、部室の全ての人間が軽く手を上げた。秀吉と呼ばれた男は、身長187センチの大男、大田道彦だった。

「そのあだ名で呼ぶのはやめろって」
このサークルの人間のほとんどが道彦のことを秀吉と呼ぶ。猿顔だからだ。舌打ちをしながら彼は部室の中に入ってきた。

頭をかく仕草もどこか猿のようだ。
「どうしたの？ 大田君。実家に帰ったんじゃないかったの？」

稲田がその立ち位置を動かす事無く道彦に声をかけた。いくら長身の彼女とはいえ、相手が道彦ではさすがに見上げる姿勢となる。
「いや、そのつもりだったんですけどね。手塚の馬鹿が僕の腕時計を持ってきたままバイトに行ったもので。それを取り戻してから帰ろうと」

「ああ、そういうこと。手塚君はここにはいないよ」
「あ、それはわかってます。藤がいないかなと思っただけに見に来たんです」

「藤原君？ なんでまた」
「ええと何かと言えば、手塚の奴、山添村でバイトをしてるらしいんですよ」

座り直していた礼子が「山添村？」とつぶやいて再び道彦の顔を見上げていたが、誰もその様子には気づかなかった。中沢はずっと盤面を見て唸っている。

「それで山添村ってちよつと遠いじゃないですか。僕は自分の車で行くだけなので、まあ大した事ないんですが、一人で行くのもあほらしいので……」

「連れて行って」

礼子が紙コップを手にとり再び立ち上がっていた。目が輝いて見える。道彦は大いに困惑した。

「え、なんで？ 僕は山添村に行つて手塚の横つ面を張り倒して時計を返してもら

つたら、もうそのまま三重に帰るつもりなんだけど。藤は実家に帰るときに、もし時間合えば車で行ける所まで送ってくれと言つてたから一緒に行くだけだよ」

「礼子ちゃん、山添に行きたいのなら俺が連れて行くよ」

顔を上げた中沢が割り込んできた。礼子は精一杯強調した笑顔を中沢に向けた。

「最初に条件を持ちかけたのは中沢さんですよ。勝負は勝負です」

中沢は舌打ちをして再び盤面をにらみだした。礼子は道彦に向き直った。

「いいじゃない、連れて行ってよ」
「そしたら僕はどうするんだ？ またこ

こに帰って来いってか？」

「うん」

「やだよ」

「心理学のノート貸したでしょ」

「僕は哲学のノートを貸したよ！」

「あんまり役に立たなかった」

「そりゃ礼子が講義を全然聞いてないからだよ！」

稲田が「あーもう」と言つて礼子と道彦の間に割り込んできた。

「いいじゃないの、大田君。こんな所で喧嘩せずに、連れて行つておあげよ」

「そんな、稲田さん……」

「先輩命令よ。それに夏休みになってすぐ帰省するなんてやつぱり勿体無いわ。今夜辺り、試験終了の打ち上げでもどう？」

そう言われれば道彦にも異論を挟めるような余地はない。部室の奥では、話を面白がつて聞いていた数人のサークルメンバーが稲田に喝采を送っていた。

「わかりましたよ。それじゃもし藤が顔を出したらよろしく言つておいて下さい」

「了解」

「あ、でも……」

礼子が口を開けて中沢の顔と碁盤とを交互に見た。中沢はその様子には気づかず盤面をにらんでいる。

稲田が手で二人を追い払う仕草を見せ

た。

「構わないから行つといで。中沢君にはここの逆転は無理よ。勝負はあなたの勝ち、礼子ちゃん」

「はい！」

礼子が道彦の背中を殴りつけ、早く行くぞと促した。道彦は咳き込みながら部室から出て行った。稲田が腰に片手を当てて微笑んだ。

「なぜ山添に行きたいんだ？」

長屋を出て道彦は礼子に声をかけた。礼子は道彦よりも先を歩いていった。なかば踊るような足取りであった。

礼子は手にした紙コップをくずかごに投げ入れ、振り向いた。

「前から興味があったの。私は車を持ってないから行く手段がなかったんだけどね」

礼子は新入生の女子にしては珍しく、一度もスカートをはいている姿を見せたことがない。常に足首まであるパンツをはいていた。足元は軽そうなスニーカーだ。赤い髪は降ろせば肩まではかかると思うが、いつも後ろでくくっている。センスが悪いわけではないのだが、女の子らしい御洒落をあまり潔しとしないようである。ただし童顔のため、単に子供っぽく見えるときもある。かと思えば時折、その辺の女優も顔

負けのはつとするほどの綺麗な張り詰めた表情も見せることがある。明るく受け答えもはつきりしているため、上級生の受けは総じて良い。ただし道彦や手塚といった同期入学の男子には生意気な態度と映ることが多く、あまりかわいい存在ではない。気を使わないで済む、という美点はあったが。

「ほう、それで今回便乗しよう」と

「人聞きの悪い事言わない。これはある意味では運命的とも言えるよ」

「手塚が運命の神だとも？」

「う、うーん……。それは」

駐車場はすぐ左手に見えている。ただし、その距離を阻害する土地の高低差と長い柵があるため、学生たちは皆、ここで大きく迂回することを強いられている。

礼子は迷いなくその柵を飛び越えた。

3

部室では、まだ中沢が唸っていた。無論、対局者の礼子の姿はそこには無い。

「もう諦めなよ、中沢君」

椅子に腰掛け奥の部員たちと談笑していた稲田が時折思い出したように声を掛けるが、中沢は取り合わない。

部室の扉を二度ノックする音が聞こえ

た。稲田は耳ざとくその音に反応して顔を上げた。このサークルで、律儀に扉をノックする人物は今の所一人しかいない。

「失礼します」

稲田の思ったとおり、入ってきたのは今年の新入部員の一人、藤原望であった。

「藤原君！」

入ってくるのと同時に部室の奥に陣取った女生徒たちが騒いだ。稲田はその嬌声を背後に受け、藤原に声を掛けた。

「どうしたの？ 藤原君。休日に顔を見せるなんて珍しいわね」

稲田の呼びかけに対し、藤原は軽く一礼した。女たちの騒ぐ声には特に興味を示さない。稲田はかけた眼鏡のフレームを軽く撫でた。

「いえ、今日実家に帰るので。その挨拶です」

「そう、律儀ね。大田君が探してたよ」

「大田が……：そうですか。すれ違ってしまいましたね」

「まだ駐車場にいるんじゃないかな。さつき礼子ちゃんが連れ出して行ったのよ」

「天野が？」

藤原は眉間にしわを寄せた。互いが気安くあだ名やファーストネームで呼び合う中、藤原は誰のことも苗字で呼ぶ。礼子が道彦を連れて行ったことに、少し怪訝そう

な顔を見せたが、すぐに彼は興味を机の上の碁盤に寄せた。

「それは？」

対局者もいままに唸る中沢の様子は傍目には奇異である。

「さっきまで礼子ちゃんが打っていたのよ。可哀相に中沢君、序盤でこてんぱんにやられて手も足も出ないのよ」

藤原は中沢の脇に進み出て、盤面の形成を一瞥した。道彦ほどではないが、彼も背は高い方である。髪は短く刈り込んでいる。その目は強い意思を持っていることを思わせた。

中沢は腕を組んだまま唸っていたが、遂に両手を挙げてさじを投げた。

「駄目だ！ 完全に俺の負けだ」

「黒が中沢さんですか？」

「そうだよ！ 白が礼子ちゃんだよ。完膚なきまでにやられたよ！ まだ中盤だけど全く戦える気がしない！ 投了もやむなし、だ！」

藤原はしばし立ったままの姿勢で片肘をつかみ、指で鼻を撫でた。稲田が中沢をからかう。

「中沢家の本因坊だったんじゃないの？」
「そうですよ！ いや、あの子にはこのサークルの本因坊の称号を与えてもいいくらいですね！ 本当、何やっても強いんだ

からかいませんよ」

「失礼」

藤原が中沢の脇に置かれていた黒石を一つ取り、盤面に勢いよく叩きつけた。藤原の手が離れると、中沢が盤面を覗き込んだ。

「まだ駐車場にいますと言いましたね？」

藤原が顔を上げて稲田に問いかけた。

「ん？ うん。多分ね」

「では行きます。失礼します」

部室の奥から藤原を呼ぶ声が幾つか上がったが、藤原はその声に一度会釈をするだけでそのまま出て行った。不満気な声が残ったが、実際彼はいつもこの調子なので女の子たちに本気で失望する様子は見られない。

「中沢君？」

稲田が盤面を食い入るように見つめていた中沢に声を掛けた。

「どうしたの？ いい手なの？」

「あいつ……そうか、そうなるのか……」

中沢がまともに返事をしないので、稲田は強引に中沢の顔をどけて盤面を見た。複雑な状況だが先程と同様の一方的な物ではなく、まともな布陣になっていることが見て取れた。

「へえ。やるじゃないの、藤原君」

「戦える、どころかこれは勝てる手ですよ。」

「ようし、礼子ちゃん呼び戻さないよ」

「あんたは既に負けていたの。もう時間切れだよ」

携帯電話を取り出していた中沢の手を稲田は優しく制した。

「そうか……。まあそうですね……」

「それで中沢君。礼子ちゃんに本因坊をあげてしまったけど、藤原君には何かタイトルが残っているのかしら？」

「あいつには……竜王を」

なかば自失している中沢の顔を見て稲田は深いため息をついた。

「中沢君、そりや将棋だよ……」

4

道彦は少し息を切らせていた。駐車場に停めた自分の軽自動車にたどり着くまでに、やや早足で来ていたからだ。先を行く礼子が躊躇無く難所を乗り越えて直線移動をしてきたため、慌ててその後を追ったのだ。

「遅いよ」

礼子は既に助手席のドアにもたれていた。腕組みをして微笑んでいる。

道彦は少し考えた後、黙ってドアロックを外した。狭い運転席に体を押し込み、助手席のドアを中から開けると礼子が滑り

込んできた。

「物好きな奴だな。そんなに山添村に行きたいのか？ 何があるんだ？」

「行ってお楽しみ。多分びっくりすると思う」

道彦は首をかしげてエンジンに火を入れた。

「それにしてもまたお前、中沢さんをいじめていたな」

「そんな言い方しないでよ。中沢さんが絡んできたんだから」

「あれじゃ日暮れまで唸ってるぞ。中沢さん、負けず嫌いだから」

「どうか。案外もう諦めてるかも。次のゲームを考えてる頃だと思っ」

道彦は笑ってサイドブレーキを降ろし、車を動かし始めた。礼子は助手席で両手を交互に前に突き出す奇妙な踊りを見せた

かと思っ、そのままの姿勢で道彦に問いかけた。

「秀吉。なんで藤にメール送らないの？」

「あいつ携帯電話持っていないから」

「あれ、そうだったっけ？」

「そうだよ」

「ふうん。まあ藤らしいね……」

納得したのか礼子はそのまま助手席に身をうずめた。

道彦の車はエアコンが壊れている。よく

よく文明の利器に愛されぬ男らしい。

「秀吉」

「ん」

「前」

車道は一時広場で歩道と合流する。礼子はその広場で手を挙げて立っていた一人の男を指差していた。

「げ！ 藤」

「藤だね。……なんで『げ』なの？」

道彦は苦笑いを浮かべて車を広場の脇に停めた。後部座席に藤原が乗り込んだ。

「間に合ったようだな」

「いらっしやい」

「お前がなぜここにいる、天野」

道彦は窓から外を眺め、知らぬ振りを決め込み、車を発進させた。

元々道彦は藤原と山添村に行く予定であった。礼子の参加は予定外の物で、まして礼子と藤原の対面は是非とも避けたい

事態であった。どちらも彼にとつては気安

い友人で、特に人格に問題があるわけではないが（多少はある）、なぜかこの二人

マが合わない。

「山添村に行くって聞いてね。前から行き

たかつたんだ」

「妙な女だな。山添に何かがあると

言うのだ」

「それは行つてのお楽しみ」

「……」

——大田。ところで俺に何の用だ？」

「いや……それが事情が変わつてしまつて」

道彦は山添村に立ち寄り、手塚から腕時計を返してもらつたと共に、三重に帰省する腹であったことを藤原に告げた。帰省の際、同乗させる約束をしていたことを告げると、藤原は納得した。しかし稲田の鶴の一声で、今日は一度帰つて打ち上げに参加せざるをえなくなり、礼子が絡んできてややこしくなっていると説明した。

「ややこしいとは何よ。いつややこしくなつたというの？ 失礼な」

「今ややこしいんだよ。藤、そういうわけで忙しいなら無理にとは言わないんだけど」

「いや。特に忙しいわけではない。そういう事情なら俺も付き合おう」

「……じゃあ一路山添村に向かつて出発しますか。礼子、どこか行きたい場所があるのかもしれないけれど、まずは手塚の所に行くからな」

「そんな念を押さなくともわかつてますつて、秀吉様」

礼子は窓を全開にして頭の後ろで両手を組み、鼻歌を歌っていた。

本当に礼子がこの状況をわかつているのか道彦には大いに疑問であった。いつも苦勞するのは自分だけだと彼は思つてた。

礼子と藤原。意見が合わない二人ではあるが、本人たちはそれほどその事実を気にしていないようであった。二人の会話は傍目には喧嘩腰にも見えるので、いつも道彦は気を揉んでいる。道彦は今日一日の道中が不安になり、早速朝の嫌な予感が的中し始めているのを感じていた。

車は大学の敷地を抜け、国道に乗つていた。礼子は窓枠で肘をつき、流れる風景を目にしたまままた見ぬ山添の地に思いを馳せていた。

奈良県山辺郡山添村。

海を持たぬ奈良県の北東部に位置する

この小さな村は、平城京に柳生の里、伊賀上野に月ヶ瀬村、それぞれが独立した観光スポットとして有名な地域に囲まれており、狭間で一人割りを食っているようにも見える。奈良県内に住む人であっても、山添村がつつじや紅葉の名所であり、かつ大和茶の名産地であることを知っている人は少ないのではないか。

何気ないありふれた風景を持つ日本の山村。しかしそこには途方も無い物語が眠

つているかもしれないのだ。それは地に潜む竜のような物で、誰かが起こさない限りは今後数千年の長きに渡り誰の前にも姿を見せることはないであろう。

竜を起すにはその髭をつかまねばならない。神聖にして侵すべからざる竜の、その最も聖なる急所を。無論それは、その力及ぶざるがゆえに万人に許された行為ではないが。その竜を、起こさないまでもその姿、白いキャンバスに輪郭だけでも描き出すことができるのならはあるいは――

礼子は普段は静かなため、周囲からは大人しい人物と目されやすい。だがそれは誤解であり、彼女の興味を強く引く何かが目の前に現れたときには、誰よりも情熱的になる。入学して半年間、これまでは新しい生活に慣れるのがやつとのこと、彼女はまだまだ自分の素顔を周囲にさらけ出しているわけではなかった。

中沢との囲碁は彼女にとって、日常と変わらぬ退屈な物であった。幾多のゲームも、対等に戦える相手がいなければそれは時間潰しにしかかなりえない。

彼女には密かに研究し、完成させたいと考えている仮説があった。そしてそのために必要な欠片が山添村に、それも数多く存在することを風聞で彼女は既に知つてい

た。大学入学後、初めて彼女は自分の心が期待に湧き立つのを感じていた。

「楽しそうだな礼子。鼻歌なんか歌つて」

「あれ？ 私鼻歌なんて歌つてた？」

「耳障りだ。やめろ」

礼子は今度は大きな声で歌いだした。目を閉じて歌う様はなかなかか堂に入っている。窓の外の歩道に止まったベビーカーの幼児が、すれ違った車を見送っていた。彼女の仮説を完成させるために必要なピースの一つは『聖石』。山添村には奇岩、怪石、磐座など、多くの聖石が存在する。

5

車は山道を疾走している。平日の昼間は道がすいている。

道彦は運転しながら朝見た夢を思い返していた。

奇妙な夢だった。

山の斜面を覆いつくすような黒い巨岩の群れ。そこを自由に闊歩する翼の生えた不思議な人間。美しい星空。夜にもかかわらずはずはつきりと見えたそれらの風景。

夢などに大した意味は無い。彼は夢占いの類を信じてはいなかった。何の脈絡も無い情景が繰り返されるのが大抵の夢の本質だ。しかしそれでも彼は、時々気になる

夢を見ることがある。そしてその夢のほとんどは、詳細な点を除けば正夢となった。道彦は首を振った。

いくらなんでもあの光景は常軌を逸している。あれほどの巨石が『並べられた』かのように一箇所に存在する場所は滅多にあるものではない。あれではまるで巨石で造られた『川』だった。山の頂上からふもとにむけて一気に伸びる横たわった巨大な黒龍。

「どうしたの？」

ふと我に返ると、助手席の礼子が目を大きく見開いて道彦の顔を覗き込んでいた。

「いや、なんでもないよ」

「ふうん？ ちゃんと前向いて運転してよ」

「助手席に座った人がきつちりナビしてくれるなら、僕も運転に集中できるのですが」

「やだよ。そんなこと言って秀吉は道を間違えたことなんて無いじゃない。ナビなんに必要ないですよ」

礼子が助手席に深く腰掛け、腕を頭の後ろで組むのが見えた。道彦は舌打ちをして笑った。

手塚雄矢は悩んでいた。彼にしては珍しい。

今彼の目の前には無数の牛が思い思いの場所で草を食んでいる。手塚は群れの中心に溶け込むように、草の上に腰を下ろし両手で頭を抱えていた。

なぜこいつらは俺の言うことを聞かないのだろう？ 俺はただこいつらに、この柵の中に入って欲しいだけなのに。もしかして俺には牛飼いのセンスは無いのだろうか？ いや、まだバイトを始めて一日目だ。俺に足りないのはセンスではない。こいつらとの信頼関係なのだ。人と牛とが信頼関係を結ぶためにはどうすれば良いのか？ 俺も牛の心になりきる？ いや、ここは威圧的に行くべきか？ 待て、水だ。水をかければこいつらは驚いて柵の中に入るかもしれない。

手塚は立ち上がった。ホースを伸ばし始めて、すぐにやめた。

落ち着け。それで柵の中に追い込めたとしてもそれは一時な物で、何度か試せば牛も慣れてしまつて今度はこそは言うことを聞かなくなるだろう。それにそんなことをしてしまえば肝心の牛と俺との信頼関係はどうなる。

手塚の心に住む二人の手塚がささやきだした。

悪魔の手塚がささやく。「何を迷うんだ。なめられたら終わりだぞ、いざとなれば首

に縄をつけてでも」

死神の手塚がささやく。「何を迷うんだ。所詮こいつらは人間に食べられるだけの存在だ。いざとなれば首に縄をつけてでも」

手塚は立ち上がった。そうだが、きつこいつらは怯えている。人間に連れ去られた仲間が、遠からず食肉として食卓に並べられるのを知っているんだ。だからこそ同じ人間である俺に対して距離をおいているフリをして、内心の恐怖を隠している。どうすればいい？ どうすればこいつらに信頼される？ そうだ、俺は人間だが牛を食べないということにすればいい。本当は牛肉は大好きだがそれとこれとは話が別だ。口に出さなければそんなことはわかりもしない。だが何と云えばこいつらにそれが伝わる？ ええい、迷うな。心に浮かんだままに真心を持つて接すればきつと牛にも俺の心は伝わるはずだ。

手塚は大きく両腕を振って、牛の群れに話しかけた。

「お前たちはおいしくないですよー」

「何をぶつぶつ言っているんだ？」

「何をぶつぶつ言っているんだ？」

背後からいきなり声を掛けられて手塚は飛び上がった。振り向くと、そこには見慣れた友人たちの顔ぶれが並んでいた。

「お前たちはおいしくないですよー」

「何をぶつぶつ言っているんだ？」

「何をぶつぶつ言っているんだ？」

「何をぶつぶつ言っているんだ？」

「何をぶつぶつ言っているんだ？」

「何をぶつぶつ言っているんだ？」

「何をぶつぶつ言っているんだ？」

「何をぶつぶつ言っているんだ？」

「何をぶつぶつ言っているんだ？」

「何をぶつぶつ言っているんだ？」

「何をぶつぶつ言っているんだ？」

「何をぶつぶつ言っているんだ？」

「おお？ 秀吉じゃん。藤も、礼子も？」

礼子は片手で笑顔を隠しながら手塚に手を振った。体重100キロを超える彼が、オーバーオールに身を包み、麦藁帽子をかぶって牛の世話をしている光景が余りにも似合っていて、笑いがこみ上げてきているのだ。オーバーオールの中に着込んだシャツは胸元ではちきれそうになっている。

「どうしたよ、雁首そろえて。社会に奉仕する俺の姿でも拝みに来たのか？」

「腕時計を返してもらいに来たんだ」

道彦が無然とした表情で片手を突き出し、腕時計を返すように促した。

「おお、あれね。非常に役立つたよ。試験の出来は上々だ。彼は立派に俺の輝かしい経歴に貢献したよ」

「いいから返せよ」

「今持つてないよ。それにしても珍しい面子だな。お前ら三人、仲良かったっけ？」

さらりと時計の件を流されて怒る道彦から視線を外し、手塚は礼子と藤原の顔をしげしげと眺めた。礼子はまだ笑っている。

「お前はまた仏頂面してんなあ、藤。お前もここで働くか？ 俺の持つ真の優しさに触れれば少しは心改まるかもしれんぜ」

「いらぬ世話だ」

笑いの収まった礼子が手塚に問いかけた。

「いらぬ世話だ」

「いらぬ世話だ」

「いらぬ世話だ」

「手塚、なんでまた牛飼いを？ 手塚にカウボーイは似合わないんじゃないの？」
 「おいおい俺を誰だと思ってるんだい？あと三十年生まれるのが早ければ『荒野の七人』にも抜擢されていたはずの男だぜ？」
 「それはカウボーイと何か関係があるの？」
 手塚は腰に両手を当て、鼻を鳴らして天を仰いだ。彼の中では確固たる因果関係があるようだが、それは誰にも理解できない。思い出したように手塚が自分の胸ポケットを叩いた。
 「そうだ。おい礼子、プレゼントやるわ」「え、何なに？」
 手塚が懐を探って、小さな腕輪のような物を取り出し、礼子に向かって放り投げた。礼子は両手でそれを受け取って、疑問と嬉しさを同時に顔に浮かべた。
 「わあ！ ありがとう手塚。これは……何かのアクセサリー？」
 黒いプラスチックでできた輪を観察し、礼子は腕にはめてみようと思いたが上手くいかないようであった。
 「鼻輪だよ。牛につける奴を特別に一つもらってきたんだ」
 「いらんわ！ こんなもん」
 礼子は鼻輪を振りかぶって投げつける

仕草をした。
 「誤解するな！ それは新品なんだ！」
 「新品だろうが中古だろうが関係ないんだよ、このすつとこい！」
 手塚が走り、礼子が柵を軽々と乗り越えそれを追った。それはもうやっただからお前の物だ、という手塚の絶叫が響き渡る。牛は皆、気ままに草を食べていた。
 藤原が腕組みを崩して指先であごを撫で始めた。
 「すつとこい」とい言葉は久々に聞いた気がする
 「そんなことより早く助けた方がいいんじゃないのか？」
 「面倒だ。ほつとけ」
 「それもそうだな。じゃあ飯でも食う？」
 「妙案だ」
 手塚と礼子は柵の中を大きく一回りしてから戻ってきた。最初は全力で走っていたが、戻ってくる頃にはほとんど歩いていった。礼子にはまだ余裕が見えるが、手塚は足取りもおぼつかない様子であった。
 「手塚、昼飯食わないか？」
 手塚はひざに手を当てて息を切らしていた。
 「ああ……悪い。俺まだやることあるんだわ。三人で行ってきたくれ」
 「そうか。どこか飯を食べる場所はある

か？」
 手塚は腕組みをして考え出した。礼子が座り込んでいた牛をそつと撫で、振り向いた牛に過剰に反応していた。一しきり遊んだ後、そのまま小走りで戻ってきて、柵に手をかけ飛び越えた。
 「そうだ、神野山行ってこいよ。あそこだつたら何か適当に食えたはずだ」
 「神野山？」
 初めて聞く地名を抱いた道彦と対照的に、礼子が喜びの声をあげた。どうやらそこは礼子が元々行きたかった場所のようだがその理由は今の所誰も知らない。
 「山添村で一番高い山だ。と言っても大した高さじゃないからすぐ登れるよ。車で行けるし。村のあちこちに看板が出てくるからそれに従って行けば大丈夫だよ。神野山に入れば、車道の脇に大きな建物があるからすぐわかる」
 「そうか、じゃあ行ってくるわ。手塚、頑張れよ」
 三人が声をかけると同時に手塚は走り出した。世話をしている牛の頭が厄介ごとを起こしたらしい。そのまま柵から離れた三人は車に戻るために歩き出した。
 道彦が振り返ると、手塚は後ろ手に手を振ってみせた。格好よい仕草のはずだが少しも格好よく見えないのは人徳のなせる技だろう。

6
 牧場を去る三人を見送るように牛が一声長く鳴いた。
 更に車を走らせた。神野山は山添村のほぼ中心に位置する。手塚の言うとおりの神野山を指し示す看板や標識は村内の至る所に存在し、道に迷うことはほとんど無かった。
 うきうきした様子の礼子に道彦が聞いた。
 「礼子、ここに何があるって言うんだ？」
 「そのうちわかるって。私も見るのは初めてなのよ」
 本通りから外れ、車は神野山へと登る山道に入った。車線が無く、周囲は木々に囲まれて少し暗くなる。
 「神社が多いね」
 礼子が車内から見た山添村の感想を述べた。
 「そうか？」
 「うん……。なんとなくだけど、少し走れば神社やそれに類する何かの社があるって感じだね。後でどこかで地図でももらえないかな？ できれば神社の名前や見る

スポットのいつばい載った奴」

「ああ、なるほど。そういうのは村役場とか行けばもらえるかな？」

「礼子がお願い、と言って助手席に深く腰掛けた次の瞬間だった。」

「なんだこれ！」

道彦は車を急停止させた。礼子が窓から外を見て大声をあげた。

「これよ！ 着いた」

車は小さな橋の上で停止していた。礼子は大喜びでシートベルトを外し、車から降りようとしていた。

「ちょっと待て！ 車を端に寄せる」

「あそこに駐車場がある」

藤原の言葉に振り向くと、確かにすぐそばに駐車場があった。騒ぎ立てる礼子をなだめ、道彦は一旦駐車場へと向かった。

礼子は車を飛び降りると、一目散に駆け出した。道彦もその後を追った。

改めて先ほどの橋の上に立った。それまでの林道が不意に途切れ谷のよう

に開けた場所で、山の上下に累々と黒い巨岩の群れがどこまでも伸びていた。

「す、すごい！」

礼子が興奮して橋の上で飛び跳ねた。道彦も興奮を禁じえない。

「なんだ……。これは」

道彦と礼子は橋の上に立っているが、そ

の橋の下には水の流れる川は存在しない。ただどこまでも続くかに見える黒い巨岩

の川が流れているのみであった。岩はどれも相当の大ききで、例えば一人一人の手で運

べるような代物ではない。それがざっと見て数千から数万、一箇所にかき集められて

いる。そんな印象を受けた。

だが興奮する礼子とは異なり、道彦は別の意味で衝撃を受けていた。

これは正に、自分が今朝見た夢の光景ではないのか？ ありえないと思っていた

その異世界が今、現実目の前に広がっている！

「鍋倉溪」

ただ一人、駐車場で見板を読んでいた藤原が聞きなれない単語を発した。橋の上から道彦は藤原に問いかけた。

「ナベクラケイ？」

「この溪谷の名称らしい」

礼子は打ちのめされたように、橋から見える風景をゆっくりと何度も見回している。

「すごいね、これは……。話には聞いていたけどこんなに凄い光景なんて」

「ちよつと来い、二人とも。面白い話が書いてある」

藤原が手招きをし、礼子と道彦はふらふらとそちらに導かれるように歩いた。道彦

はまだ自分の受けた衝撃から立ち直れず何も考えることが出来ない。

「これはどうもただの岩の群れではないらしい」

藤原は看板の内容をざっと読み上げた。曰く、鍋倉溪の名の由来は、鍋の底(ク

ラ)のように黒い岩が無数に集まっているからと言われている。この黒い岩は角閃斑

レイ岩であり、この近辺ではここにしか存在しない岩質であるとも。

村に古くから続く伝承では、元々神野山に住んでいた天狗が、付近の青野山に住む

天狗と喧嘩をしたとき、岩を投げ合ってしまったのがこの鍋倉溪と言われている。

「ところがだ」

藤原が新しい方の看板を指差した。そこには二十一世紀になってから発表された、鍋倉溪に関する、とある仮説が書かれてい

た。

この神野山にはこの鍋倉溪以外にも、無数の名のある巨石が存在する。古くから知

られた巨石群であるが、その所在地をG P S (グローバル・ポジショニング・システム)で確認し、地図上にその位置をプロット

トしていくと、何と天空の星図にびたりと重なる絵が浮かび上がる。

神野山山頂の『王塚』が白鳥座デネブに、山腹に存在する『八畳岩』がこ座ベガ、

『天狗岩』がわし座アルタイル、『竜王岩』がさそり座アンタレスの位置関係にそれぞれ対応している。デネブ、ベガ、アルタイル。これら三つの星は、夏の夜空に描かれる著名な『夏の第三角形』の構成要素であることは言うまでも無い。更にそれら神野山の巨石群を天球図になぞらえた時、この鍋倉溪は夜空に浮かぶ天の川の位置に対応する。

すなわち神野山の巨石群は天空の星空を模した物である、との趣旨の内容であった。

一同は誰も声を発することができなかった。あまりにも荒唐無稽？ 笑い飛ばすだけなら簡単にはできたであろう。しかし目の前に累々と横たわる異形の巨石群、鍋倉溪を見たばかりの三人にとつて、その行為は簡単ではなかった。

「知っていたのか？」

藤原が礼子に尋ねると、礼子は無言でうなずいた。

「これを見に来たのか？ 何だこれは。一体なぜこんなものがここに」

「それを調べに来たの」

圧倒的に異質な空間が広がっているのだ。似たような光景はこれまで全く見たことが無かった。

星空を地上に投影している――。

道彦は空を見上げた。正午前の青空に、薄い雲が散っていた。道彦はそこに、飛来する翼持つ人を見た気がした。

7

座敷で三人は無言のままに座っていた。窓から見える正午時の空は青く、一日が半分以上残っていることを示している。

礼子はテーブルに突っ伏していた。道彦も足を崩している。藤原だけが一人背筋を伸ばして姿勢良く座っている。

三人は神野山の中腹にある森林公園の施設の一つ、映山虹に来ていた。鍋倉溪のすぐ傍にあるこの森林公園には幾つかの施設が固まって存在する。映山虹は簡単な食事を取ることもできる施設で、手塚が勧めた場所はここに相違なかった。

ひとまず注文を終え、礼子は建物の中を物憂げに見渡した。だだっ広い建物で、何かのホールのように見えなくもない。客は三人以外には誰もいない。広い客席を独占したような状況であった。だがその光景はわびしさでは無く余裕を生み出す効果を持っていた。

「藤」

道彦が藤原に声をかけた。

「何だ」

「あれ……どう思う」

「鍋倉溪か」

「ああ」

藤原はあくらかをかいいた自分のひざを軽く撫でた。鍋倉溪はこの森林公園からでも歩いていけるほどの距離にある。それほど近い距離にもかかわらず、あの鍋倉溪に類する光景はこの辺りにも存在しない。

「どうとは？」

「あれは……人工の物だろうか」

道彦の頭の中では朝見たばかりの夢の断片が渦巻いている。翼持つ人が巨石を軽々と抱えて鍋倉溪を作り出す印象が頭を離れない。

道彦の言葉に藤原は小さく笑った。

「馬鹿な。あれほどの巨石群を一箇所に集めるのは大変な労力だ。確かに人知を超えた光景ではあったが、あれを人工の産物とする人間は自然の力を甘く見すぎている」

「じゃあ、あそこの看板に書いていた内容この神野山に存在する巨石群が星雲を地上に模した物である……という話については」

「ナンセンスだ」

藤原は窓の外を眺めたまま答えた。

「えらく威勢がいいね。さつき鍋倉溪のそばでは何も言わなかったくせしてさ」

礼子が横に座った藤原の顔を見上げて

言った。その口元は少しだけ笑っている。

「人工であろうが自然の産物であろうが、あれほどの奇観だ。あの時俺が何も言わなかったのは、単に鍋倉溪を一級の観賞物とした上での反応だ」

「ふふ、まあいいよ。そういうことにしてあげよう」

礼子は微笑んで窓の外を見た。

しばらく誰も口を開かなかったが、落ち着きを取り戻した道彦が礼子に話しかけた

「それより礼子」

「何？」

「お前が山添村に来たかった理由はあれなんだな」

「うん。まあそれだけじゃないけど……」

「それだけじゃない？ いや、それはいいや。礼子はあの鍋倉溪を以前から知っていたということか？」

「知っていたどころの騒ぎじゃないよ。私はあの鍋倉溪を中心とした山添村の巨石群、その存在理由が知りたくてここまで来たんだ」

礼子は自信に満ちた笑みを一人に向けて。男たちはお互いに顔を見合わせた。

「理由を知りたいってのはどういうことだ？ 誰かに聞けば教えてもらえるってことか？ それともどこかに書いている

ってことか？」

「ちよつと違うかな。私自身の問いに対する答えは、誰も知らないことなんだ。」

最近ではそれこそ多くの研究者が、この神野山を中心とする山添村の巨石群の抱える無数の謎に対して独自に答えを見つけて出そうとしているけど、本当の意味での解答はそれこそタイムマシンの完成でも待たないといけないと思う。

こういう謎は数学や物理のそれとは質が違う。誰もが答えを提示することが出来るし、そして答えは数多く存在するほど面白いんだ。私はその中でも一際目立つ、美しい絵を描き出したい」

道彦は少し驚いて礼子の表情を見直した。涼しい顔をしている。

今までは単に協調性の無い少しばかり顔の目立つ同級生とのみ思っていたが、こいつは相当変わっている。そんなことを考えるようになったんだ？

「礼子」

「ご飯が来たよ。話は後」

道彦の問いかけを遮るように礼子が後ろ指で背後を示した。

「茶そうめんセットをお持ちいたしました」

座敷の脇に映山虹の店員がおぼんを抱

えて立っていた。礼子がテーブルの上を簡単に片付ける。

「お客さん、どちらから？」

「奈良市です」

「観光ですか？ 季節が少し違いますよ、春のつじはそら綺麗ですよ」

店員は礼子と受け答えをしながらテーブルの上にぼんを並べていった。礼子がそれを手伝い、テーブルの奥にまで配膳する。

「鍋倉は見に行かれましたか？」

「はい、今見てきたところです」

「すごかったですよ」

店員は喋りながら手で三人に食べるように促し、道彦と藤原がそれにならった。道彦は礼子にまだ聞きたいことがあったが、今聞いても答えないだろうとわかっていたので黙って食事を始めた。礼子は食べながら会話を続けた。

「びっくりしましたよ。何もない普通の山道に、いきなりあんな物が現れるのですから」

「そうでしょうねえ。近頃ではあれを研究してる人もちよくちよく来るようになってます」

「その辺り、何か面白い話でもありますか？」

礼子がそう問いかけると店員は空でひじをつき、少し考えて話し出した。

「そうですね……」

聞いた話なんですけどね。あの鍋倉を埋め尽くすのはなんでも角閃斑レイ岩つちゅう岩らしいんですけど。その角閃斑レイ岩は生駒石という別名どおり、奈良県の生駒山でしか取れない珍しい岩らしいんです。そんでその角閃斑レイ岩が分布しているのは、日本中でも奈良県の三箇所、神野山と一体山と生駒山でしかないそうですねえ」

「そうですねですか！」

店員は自信なげにうなずいた。道彦も驚いて店員の方に顔を向けていた。藤原は無言のままに興味をなさそうにしていたが、その箸は少しの間止まっていた。

店員はそのまま会釈をして厨房に戻り、三人は食事を再開した。

「どういことなんだ？」

道彦が首をひねると礼子が少し興奮気味に答えた。

「ちよつとすごいかもしれないね。鍋倉溪人工説を裏付ける話かもしれないよ」

「なんで？」

「この奈良県の東の端に存在する山添村に、奈良県の西の端である生駒山から採れる岩が無数に存在する。つまりは、この神野山に存在する角閃斑レイ岩は生駒山から運ばれてきた物であるとすれば、鍋倉溪

も人の手によって作られた物かもしれない、ということだよ」

「下らん」

藤原がそはをつゆにつけながら声を発した。

「角閃斑レイ岩は元々神野山でも産出するのではないかと。仮に神野山の角閃斑レイ岩が今は生駒山でしか採ることができない岩であったとして、昔もそうであったのか？ なぜわざわざそのような遠くから、あれだけの岩を運んでこなければならなかったのだ？ わざわざ運んだにしては無造作にすぎないか？ 反論など幾らでもできる」

「たたくロマンの無い男ねえ。まあ藤らしいよ」

礼子は笑ってそう言うと、箸を伸ばして漬物をかじった。

食事をしながら礼子が鍋倉溪にまつわる民話を一つ話した。

曰く、鍋倉溪には日本百名水に選ばれている水が流れている。ただしその水はぎつしりと詰まった黒い角閃斑レイ岩の群れに遮られて窺い知ることできない。伏流水と言われるもので、音はずれとも見ることはできない。

昔、村で親を亡くした子供は、正直者に限り、鍋倉溪の水に映る自分の親の顔を見ることができたそうである。ここから鍋倉溪の水を見ることができれば、長生きをし、幸せになることができるという言い伝えが今に至るまで残っているとのこと。

「とまあこいつい感じ」

話しながら礼子は漬物をつまんだ。正面にいた道彦がそれに答える。

「さっきの天狗の話だけじゃないんだな」

「そうですね。藤が言うとおり、あれほどの奇観だからね。それにまつわる話も多く存在し、かつまた現代においても生まれてくるということなんだろうね」

「礼子はどう思う？」

「さっきの、鍋倉溪が人工かそうでないかについて話？」

「そう」

礼子はちらっと横目で藤原を見て、唇の端を微かに曲げながら答えた。

「さあね。でもあれが人工であると考えるほうが確かに楽しいよね」

藤原は無言のまま窓の外を見つめたままだった。

会計を払うとき、礼子は再度店員に話しかけた。

「あの鍋倉溪なんですけどね。人工の物がそうでないかって話、その辺りどうなっているか、ご存じないですか？」

「さあね。でもあれが人工であると考えるほうが確かに楽しいよね」

藤原は無言のまま窓の外を見つめたままだった。

会計を払うとき、礼子は再度店員に話しかけた。

「あの鍋倉溪なんですけどね。人工の物がそうでないかって話、その辺りどうなっているか、ご存じないですか？」

「さあね。でもあれが人工であると考えるほうが確かに楽しいよね」

藤原は無言のまま窓の外を見つめたままだった。

会計を払うとき、礼子は再度店員に話しかけた。

「あの鍋倉溪なんですけどね。人工の物がそうでないかって話、その辺りどうなっているか、ご存じないですか？」

店員は少しきよんとしていたが、すぐに微笑んだ。きつと何組かに一つは同じような話を持ちかけられるのだろう。

「地質学の先生なんかの中にはあれは自然にできたものだ、という話をしている人もいるみたいですねえ」

「というところ？」

「今でこそなだらかな地形になっているけど、あの鍋倉溪には元々両脇に岩壁がある谷に落ち込んで行ってああいう風景になったというところらしいんです」

「なるほど……そうなんです」

そうは言ったものの、礼子は納得のしかねる顔をしていた。確かにあそこは『谷』ではなく、山の斜面の一部分、言い換えるならば傾斜を持った平地に違いないからだ。そのようなプロセスを辿ったとは直感的に納得しがたい。

結局結論のつけようが無い。この問題は中途半端なまま立ち消えになるのかと道彦が思ったその時、店員が一言付け加えた。「もつと詳しく知りたければ、この隣に森林科学館という建物があります。そこには今お姉さんたちが話していたようなことを研究する人たちが集まっている場所があるんです。そこに行つて聞いてみたらどうですか？」

礼子たち三人は丁重に礼を述べて映山虹を後にした。名産の茶を原料にした茶そうめんは夏の空気によく合っていた。

森林科学館には『山添村いわくら文化研究会』という看板がかかっていた。三人は靴を脱いで中に入ったが、そこには誰もいなかった。

「仕方ないか、平日の昼だしね。夏休みの私らとは違う」

礼子は事務所の中を少し覗いて見てため息混じりにそう告げた。藤原は森林科学館の奥の展示物を眺めていた。

「礼子、藤、これもしかしてこの辺りの地図じゃないのか？」

道彦が小さな紙を手を声かけた。太陽の光が微かに入るだけの薄暗い廊下を、二人は道彦の背後にまで歩み寄った。

道彦が手にした白い紙は、確かに山添村の地図のようであった。『山添村いわくら文化研究会』の名が地図の上部に印刷されている。礼子が道彦と藤原の間を割るよう

に、二人の肩に手をかけた。

「どれどれ……？」

「今俺たちがいるのは神野山だからここだな」

道彦が地図のほぼ中心を指差した。神野山はなだらかに広がる山で、山添村のほぼ

中心に位置することが見て取れた。

「やたらポイントされた点が多い」

藤原が地図を一瞥した感想を洩らした。

道彦はそのポイントのうち、神野山に記された幾つかのポイントを示した。

「この線が鍋倉溪。その周りに竜王岩、天

狗岩、八畳岩、王塚、だ。これがさつき話

に出できた地上の星空の構成群だな。この

傍には更に『大師の硯石』、『塩瀬地蔵』

……」

「また巨石があるのか？」

「まだなんて物じゃない」

道彦は地図を持ったまま振り返って言った。礼子は黙って笑っている。

「何だこれは？」

めつたに声を荒げることの無い藤原が

驚いて声をあげた。地図に描かれた無数の

プロットの意味に気がついたのだ。

地図は等高線を基調にしたありふれた

物。ただしそこには無数の点、びつしりと

書き込まれたそれらの地点を示す名称が

併せて書き込まれている。

道彦が地図を指でさつと撫で、端で止め

て言った。

「山添村には……この鍋倉溪を始め、名の

ある巨石がどうやら六十以上は存在する

らしいな」

8

その頃彼らのもう一人の友人である牛

飼い手塚は、休憩時間を利用して村の中

どこにある売店まで飲み物を買って来て

いた。鼻歌混じりにスクーターに乗っている

が、スクーターは持ち主の重みに耐えかね

て悲鳴を上げながら走っている。

彼は道彦たちが未だ山添村を散策して

いるとは思ってはいなかった。どうせあの

まま名阪国道にでも乗って、月ヶ瀬か上野

の辺りにまでドライブに出たのだろうと

推測していた。だがそれで、のけ者にされ

たと感じるほどの小さな心の持ち主では

ない。

「あいつら、俺がいなくてきつと寂しい思

いをしてるだろうな」

自分のいない心の隙間を埋めるため、三

人はあれこれと意見を出し合って、健気に

お互いを盛りたてているのだろう。これで

誰が真のリーダーか彼らも痛感したこと

である。今しばしの辛抱だ。主の帰還を

待てば、それから再び蒼薇色の毎日が始

まる。

三人は手塚と農場で別れてから、一度も

彼を思い出すことは無かった。天才の苦悩

がいつの世でも深いものならば、その逆も

また真である。

売店まで三百メートルほどの場所で手塚は、一人の女性が道の端で右往左往していることに気がついた。同じようにスクーターを運転していたようなのだが、そのスクーターは道の端の側溝に落ち込んでおり、女性の力では引き抜くことが困難な有様のようであった。手塚はその女性のすぐそばで停車した。

「どうしました？」

ヒーローは常に弱者を助けるものだ。市井のトラブルを些事と笑わず、一つ一つを解決していけばいずれ世の潮流は良き方向へと流転する。

女性はフルフェイスのヘルメットをかぶったままだった。溝にスクーターを突っ込んでしまっただけから、それほど時間が経っていないらしい。

「あ、あの、ゆっくり走ってたんですけど、泥でスリップしちゃって……」

女性がかなり狼狽しているらしいことは一目でわかった。彼女が指差す方向を見ると、確かに道路の端にタイヤの踏み跡も真新しい泥の塊があるのが見えた。道路には女性の物と思われる手荷物が散乱していた。

「抜けますか？」

手塚はスクーターを降りるとヘルメットを脱いだ。

「いえ、それが全然大目なんです……」

手塚は腕まくりをして近づくと、スクーターを力任せに引き抜いた。その体格は伊達ではなく、例えばコーラの瓶を栓抜きなしで開けることも彼にとっては造作も無いことである。

引き抜いたスクーターだが、前輪は無残にパンクしていた。その上シャフトが曲がっているらしく、ただ押すだけでも一苦労するような代物に成り果てていた。

「どこから来たんですか？」

「あの店からです。店番をしてたんですけどお使いを頼まれて……」

「そうですか。どちらにしても一度戻らなといとけないみたいですね」

女性が手塚の目指す店から出てきたことを知り、一瞬彼はそのまま壊れたスクーターを押ししていくことも考えたが、この炎天下でそこまでするほどのことはないと思いついた。

ヒーローは常に忙しい。市井のトラブルなど些事に過ぎず、一つ一つに関わってれば時間はどれほどあっても足りないものだ。

「そうですね、では店が近いのならば軽トラックなど借りてきて……」

手塚が言いながら振り向くと、女性は道端に落ちていた荷物を拾っていた。先程ま

でかぶっていたヘルメットを脱いでおり、中から出てきたのは短い髪の若い女性、それも驚くほどの美人であることが一目でわかった。

「そこまでで宜しいでしたら私がこれを選んで差し上げましょう」

「はい？」

女性が手塚を見上げると、手塚は既に壊れたスクーターを片腕で肩の上に担ぎ上げていた。女性は驚いて、もう一度荷物を道路にはら撒いていた。

「だ、大丈夫なですか？」

「心配無用です。お嬢さん、お名前は」

「え、あ、羽田、羽田有姫と申します。あの本当にいいのですか？」

手塚はアメリカ大統領のような笑顔で力強くうなずくと、一步一歩大地を踏みしめて歩き出した。

「ありがとうございます、助かります！」

背中に女性の感謝の声を浴び、手塚はこの日一番の晴れがましい気持ちでヴァージンロードを歩いていった。既にスクーターは重さを感じさせず、彼は背中に翼が生えたかのような錯覚を覚えていた。

手塚雄矢十九歳、真夏の恋の始まりであった。

9

礼子たち三人は神野山山頂の展望休憩所に来ていた。低山とは言え、付近では最も標高の高い山であり、そこからは360度どこを見渡しても広い景色が広がっている。ついこの間までテストにあえいでいた現実が嘘のようだった。

「いい景色ね」

礼子は柵に手をかけ、髪を風にたなびかせていた。ここまで登ってきた疲労はほとんど感じさせない。それは他の二人とて同じことであつたが。

「礼子、今見てきた二つは……どう思った？」

道彦が礼子の斜め後ろに立ち、同じ方向の景色を見ながら言った。

三人は山頂に至るまでの間、地上に描かれた夏の星空の構成群のうち二つ、天狗岩と王塚を見てきたところであつた。累々と巨石の積み重なる鍋倉溪のすぐ脇には参道が存在し、その道を辿るとそのまま山頂へと向かうことができる。鍋倉溪は上下600メートルほどの長さに渡り存在するが、そのまま山頂まで続いているわけではなく、次第にまばらな配置となり、やがて山の中腹で地中に消える。その消える辺りにいわゆるアルティールを具現する割れた

巨石、天狗岩が存在し、そこを更に抜けるとやがて山頂である。山頂には土を盛った墳丘墓、王塚が存在し、それが夏の夜空のデネブを具現すると言う。

礼子は山添村に来る前から、村に多く散らばる巨石群の存在を承知していた。先程礼子が解き明かしたいと語った謎は、鍋倉溪のみならず、村内に存在する複数の巨石群にまたがる類の物らしい。山頂に着くまでには道彦と藤原はその辺りの事情を心得ていた。先程の道彦の質問はその辺りの意図を汲んだものだ。

「見た目は案外普通よね。重要視されるべきはその位置と、各々にまつわる名の由来や伝承、なのかな」

「王塚と天狗岩。どちらも確かにいわくありげな名前だけど」

「それぞれ異なる民話が伝わってるよ。」

「ここは民話とそれを今に伝える場所の宝庫だね」

藤原はただ一人柵に背をもたれかけ、風景に背を向けていた。もともとその視線は道彦をかすめて向かいの風景を見ることとなっている。

「どんな話があるのだ？」

「あれ、藤、やっぱり興味があるんじゃない？」

「オカルトじみた与太話と民話は無関係

だ。それは立派な文化であり、その地を訪れた人間にとって少なからず意味をもたらすものだ。ごたくはいいから早く話せ」

仏頂面の藤原の肩を二度軽く叩くと礼子は微笑み混じりに話し出した。

「まず天狗岩ね。話は二つ」

その名の通り、神野山の天狗岩は天狗伝承を持つ。

先の鍋倉溪の形成にまつわる民話として、青野山の天狗との岩を投げるいさかいの話が残っていたが、その相手となった神野山に住まう天狗はこの天狗岩の上に立ち、ねぐらともしていたという伝承である。

「もうひとつの話は、割れているようにも無数の巨石が集まっているにも見える天狗岩は、陰陽思想の象徴ともされていたというお話」

「うーん……。まあ取り立てて珍しい話でもない、のかな」

「天狗岩一つを取るとそうね。でもこの神野山にもう一つ存在すると言われる大巨石、八畳岩にも天狗岩と同様に天狗にまつわる話が伝わっているみたいなのよ」

「当然だ……。神野山そのものに天狗にまつわる話が存在するのだとすれば、その山中における一つ一つのスポットに、天狗にまつわる話が残っていても別段不思議なことではない」

藤原は軽く毒づいたが、そもそも話に興味が無いとき、彼は何も発言することは無い。そのことは道彦も礼子も知っていた。「古くから存在したであろう二つの巨石、天狗岩と八畳岩に、それを結ぶためのラインとして、同じような天狗伝承が残っている、という事実は評価すべきじゃない？」

「詭弁だ」

いよいよ礼子は機嫌が良くなった。道彦は苦笑しつつ礼子に先を促した。

「礼子。それでもう一つ、王塚についてはどう？ また天狗にまつわる話か？」

「ううん、違う。あの王塚にはある悲劇の女神が埋葬されているという伝承があるの」

藤原が眉を小さく動かした。

曰く、王塚に埋葬された女神の名はヒノハヤヒノミコト。国生みの女神イザナミが、炎の神カグツチを生んだ際焼け死に、夫であるイザナギが怒りでその原因となったカグツチの首を切り落とした際、迸った血が岩にかかって生まれた神であるという。

元は伊勢に居を構えた女神であったが、類まれなる美貌を持っていたため、数多の男神から言い寄られ、この神野山まで逃げてきたとのこと。追っ手から逃れるために神野山山中の弁天池の中に、姿を竜に変え

て潜んでいたが、そうとは知らぬ男神が一刀のもとに切り伏せたところ、たちまちにして元の姿を取り戻したが、その時には既に死んでいたという。男神は嘆き、この神野山の山頂に墳丘を設け、ヒノハヤヒノミコトを埋葬したという。

「とまあこういう話らしいよ」

「へええ」

土を盛った王塚は、確かに古墳と呼んでも差支えが無い。だがこの塚には考古学的なメスが入っていない。すなわち、この盛り土が神の墓であることを示す証は、ただ当地に伝わる伝承だけなのだ。

道彦はふと何かが気になって考え事を始めた。

「どうしたの？ 秀吉」

「そのあだ名はやめると言うのに……。いや、何でもない疑問だよ」

「疑問？ 是非教えて」

礼子の目が犬のように輝いているように道彦には見えた。藤原も興味を示すかのように腕組みをしたまま道彦の顔を見つめている。

「いや……。なんで女神の話が残っているのに『王』塚と言っただろう？ 直感的だけど、話を聞く限りでは神塚、とか姫塚、とか呼ばれてそうなんだけど」

礼子が唇を尖らせて小さくうなずいた。

「あと……」

「あと？」

「いや、これこそ何でも無い素朴な疑問だよ。なんで王塚だけ巨石ではなく、土を盛った塚なんだろう……つて。ごめん、なんでもないよ」

「いや、面白い」

返事をしたのは藤原だった。礼子も大きくうなずいた。

「確かにその通りね。地上の星空を描いたと言われる構成要素の一つが、巨石ではないのは確かに微妙よね」

「それだけではない」

藤原がもたれていた柵から反動をつけようのように起き上がり、まっすぐとした体勢で立った。

「この神野山……おそらく村内でも最も神聖視されている場所だと思うのだが。」

地図を見ただろう。これほど巨石が多く存在する山添村であるのに、その神野山の山頂という重要な場所に、なぜあえて巨石を一切使用していないのだ？ この奈良県内には石舞台の例もある。実際にあれが古墳だったとして、これほど巨石の多い地域ならば当然それを利用したくなるのが人情ではないのか？」

「なるほど、藤。その話、乗ったよ」

礼子が人差し指を立てて同意を示した。

藤原は小さく鼻で笑った。

「好きにしろ。大田の疑問から派生した、俺の素朴な疑問という奴だ」

道彦は天を見上げていた。

「王塚にだけ巨石が使われていない。そのことに実は重要な意味があるのかもしれないね」

礼子が指で空を叩くような仕草を見せた。きつと今の話を心の中でメモにとつているのだろう。

道彦はため息をついた。どちらにせよ、この探索はここまでだ。明日には彼は帰省しているのだろうし、その間この奇妙な趣味を隠していた女性が何をしようと知った事ではない。帰ってくる頃にはもう少し面白い話を聞けるのかもしれないが、それについてはあまり期待もしていなかった。

二、三気になることはあったが、それはさておき既に明日からの予定を考え始めていた道彦に礼子が話しかけた。

「さてと。秀吉。一つ頼みがあるんだけど」

道彦はぎくりとした。微かに嫌な予感がある。

「いやだ」

「まだ何も言っていないよ。秀吉、藤。みんなこの夏休みは実家に帰るの？」

「そのつもり」

来た、とばかりに道彦は即答した。仮に

帰省しなかった場合、冷房の壊れたアパートで夏を越えるのは確認するまでもなく相当に難しい。

藤原は聞かえていないのか礼子の問いには答えなかった。礼子は腰に左手を当て、右手で二人を指差した。

「どりあえず盆まではこつちにおいて」

「は？」

礼子の突然の注文に道彦は思わず素っ頓狂な声をあげた。ある程度予測はしていたが、これほど直接的な表現で来るとは彼は思っていないかった。

「私の研究に付き合ってくださいよ」

「おいおい僕は」

「無理？」

礼子は道彦にずいといと詰め寄って顔を見上げた。道彦はたじろいだ。礼子の目は強い力を持っていて、道彦はいつもその眼差しに参り、無茶な要求を通されていた。

奈良総合科学大学の夏期休暇は八月、九月の二ヶ月間。短い物ではない。その間手塚のようにアルバイトにいそむ者もいれば、語学研修などの自己研鑽に当てる勤勉な学生もいるだろう。学祭などの秋のイベントの準備に向けて多忙な人間もいるかもしれない。だが、現実ほとんどは生が無為の時を過ごす。道彦自身も、それほど確固たる理念に基づいた余暇の利用計画を考えていたわけではない。だがここで礼子の言うとおり、休暇を彼女の気紛れに合わせて消化するのは彼の本能が許さなかった。道彦は藤原に助け舟を求めた。

「ちよ、ちよと待てよ。そうだ、藤。お前、実家は？」

「茨城だが」

藤原は低い声で答えた。なぜかはわからないが寂しそうな声であった。

「お前も実家に帰るだろう？ 何とか言ってくれよ」

「俺は……残ってもいい」

「え？」

道彦は藤原の意外な答えに驚き、再び素っ頓狂な声をあげた。礼子も少し驚いた風だったが、すぐにまた悪人のような笑みを浮かべて腕組みをして言った。

「全く、藤は素直じゃないんだから。興味があるならあると言いなよ」

藤原は礼子の顔を見つめたが、礼子はその視線を外す事無く不敵に笑った。

しばらく藤原は無言で礼子の顔を見ていたが、不意に笑みを浮かべると道彦の肩を叩いた。

「この女……。一人で放っておくと危険だろ。残れ、大田」

道彦は声にならない反論を口の中で咀嚼

嚼したが、二人の顔を順に見て大きなため息をついた。

「……まあ三重は近いからな。五月にも帰ったし。わかったよ、付き合いますよ」

道彦は夏の間、藤原の部屋に居つくことを既に心に誓っていた。

「よし、覚悟は決まったね、お前たち」

礼子は悪巧みが決まった悪役のような笑顔を見せてみた。

黙っていれば見られるのに、なぜこの女はしよっちゆうこういう表情をするのか？

道彦はそう思ったが、すぐに諦めのため息をついた。

「探そう。山添村の巨石群に隠された謎と秘密を」

——『大地の星、天の磐』続く

イワクラ学会会報